

連 載

## 長寿科学と健康文化

佐久間 貞行

いま我が国は平均寿命が男性 75 歳、女性 82 歳という世界第一の長寿国となった。一方出生率が減少して、急速な高齢化社会の時代を迎えようとしている。長命を寿ぐことのできる社会に向かって、改めて個人の健康と社会環境の関係が問い直されようとしている。

平均余命の延長は先ず栄養の改善による乳幼児死亡の減少と、結核等炎症性疾患の克服による青壮年の死亡の減少がもたらした。壮老年の死亡原因の多くは癌と循環器疾患であり、その対策も一応成果が上がりつつあるがまだ十分とは言えない。さらに高齢期の健康を考えると、これら成人病の治療による克服ができ、また老人惚けが改善されるようになり、さらに予防できるようになったとしても、無病息災であるだけでは QOL (Quality of life) を考えればまだ不十分である。よく言われるように精神的な豊かさが必要である。しかし精神的安寧を得ることは決して容易ではない。例えば最近よく言われる高齢者の就業についても、また家庭看護にしても、奉仕的作業蔑視の一般的傾向や今進行している核家族化など、高齢化と健康を取り巻く人的環境は決してよいとはいえない。哲学の不在とでもいえる社会環境に問題があろう。

我々が親しみたい残したいと言っている自然環境も、昨今多くの指摘があるように地球は人為の影が覆い、天然という意味での自然は無くなっている。現在では現象の中にのみ自然はあるといっても過言ではないであろう。自然科学とは言い得て妙である。人も文明によって長命がもたらされた。と同時に一方で健康は文明故に損なわれた点もある。しかし生物はその環境に適合しているものが成長、生存できるのであり、今や健康の維持は文明によるというよりは文化により健康を創造する時代に入ったと言えよう。近未来を単なる高齢者の多い社会にとどめるのではなく長命を寿ぐことのできる長寿社会にするには、健康づくりは医学のみではなく哲学さらには経済学、社会学、芸術などを基礎とした「健康文化」とでもいうべき新しい観点から総合的に研究を推進する必

要がある。

来たるべき21世紀の高齢化社会を明るく活力に満ちた真の意味での長寿社会にするための総合的な拠点施設として、「あいち健康の森」（仮称）と長寿科学研究センター（仮称）の建設が進められている。そしてここを「長寿科学」の発信基地にしようとする機運が高まっている。健康文化としての長寿科学を考える時、将に「あいち健康の森」「長寿科学センター」のような研究と実践の場が必要である。この欄では、長寿科学と健康文化に関する資料、考察等を連載したいと思っている。

（名古屋大学教授医学部放射線医学教室）